

小学校英語教育と 小中連携、ICT活用

高木 浩志

現在の勤務校等
兵庫県宝塚市立南ひばりが丘中学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校／1994年帰国

上海日本人学校赴任中に、英語とICTの必要性和将来性を認識。帰国後は全国海外子女・国際理解教育研究協議会（全海研）に所属し、活動しながら、宝塚市の中学校英語科担当者会や英語教育系の学会等に参加して研究発表を積極的におこない、全海研の副会長や兵庫県海外子女教育研究会（兵海研）の会長などを歴任。民間の助成金によるICT教育の研究開発にも取り組んだ。2016（平成28）年に市立小学校校長に着任。小中連携や教員への研修実施など、市内の公立小学校への英語導入にあたって推進役を果たしながら、校長会を通して、兵庫県内の小学校英語教育の組織作りにも尽力した。ICT教育においても、宝塚市や兵庫県でも校長会の代表として、推進した。



実践・活動の内容

教頭までずっと中学勤務だったが、2016（平成28）年度から小学校校長になった。新学習指導要領にもとづいて2020（令和2）年度から小学校3年生以上で英語教育が本格導入されることになり、2018（平成30）年から2年間の移行措置がとられていた。そのプロジェクトを推進するための人事だと思われた。

それまで英語を担当したことのない教員への指導をするために外部講師を呼んだ研修会を実施し、校長みずから英語の授業を担当した。宝塚市の小学校外国語活動部会にも新しく参加した。

小学校教員の中には、英語の授業に積極的でない人も多かった。当時の宝塚市の小学校では英語を指導できる教員も、指導案も、教材も足りなかった。英語免許を持っている教員も少なく、ALTが中心になっていた。（まだ、専科教員は配置されていなかった。）将来は担任が英語も担当することになるのに、日々学級運営や児童対応で多忙な教員は授業研究にあてる時間もなく、研修も一部の教師が受講したのみにとどまっていた。

しかし一方で、英語教育に興味を持っている教員はとても熱心に取り組み、実践的な英語を学んできた20代の教員が現場には増えてきた。

こうした状況下で、宝塚市小学校外国語活動部会（のちに外国語部会）では、中学の授業見学や実践的な指導に関する研修会などを実施して支援にあたった。また、小中連携として、学期に1回ずつの交流会や、小中互いの授業見学も実施、大学研究者からの助言も受けた。

外国語科・外国語活動の現場では、電子黒板や大型テレビが積極的に活用されていた。教員が英語の発音が苦手でも電子教材に補完させるなど、様々な場面で利用できる。しか

し、従来型の授業スタイルに固執し、機器の取り扱いを含めて電子教材に対して苦手意識を持つ教員も多かった。そこで、私自身も積極的に ICT 機器を活用しながら、研究授業をおこなって普及につとめていった。

現在の宝塚市内の小学校では...

- ▶ 月1回のALTの派遣日のみの外国語活動からの進展
- ▶ 年間計画はあるが...指導案が不足
- ▶ **5校で専科教員(24校中)フルタイム+非常勤 要英語免許**
- ▶ 授業者は、専科教員とALTが中心
- ▶ 指導できる先生の不足⇒要 中学・英語の免許
- ▶ 担任が指導?専科・ALTが指導?
- ▶ 毎日が児童対応で忙しく、授業研究もできない
- ▶ 研修は一部の教師のみ
- ▶ **若い教師の増大⇒実践的な英語を学んできている。(20代)**

宝塚市小学校外国語部会では

- ▶ 中学校への授業見学
- ▶ 夏季研修会の実施 (実践的な指導、大学の研究者からの講話)
- ▶ 校区内の中学校との連携
- ▶ 授業研究会の拡大(ブロック制)
- ▶ 小中合同授業研究会の実施(小1回、中1回)
- ▶ 授業に活用できる資料の配付
- ▶ 兵小長での外国語活動・外国語科の部会発足(今年より)

宝塚市での小中連携の取り組み

- ▶ 今年で5年目
- ▶ 交流会を3回計画(学期に1回ずつ)
- ▶ 小中がお互いの授業見学(小学校へは、昨年始めて)
- ▶ 中学校校区内での小中の情報交換 保幼小中連携事業
- ▶ 中学校英語祭への招待
- ▶ 大学の研究者からの助言(3年目)

「(普通の小学校での実践から) 移行措置1年目の現在の状況からこれからの問題点を探る—新学習指導要領の実施に向けての方策を考える—」報告のスライドより



電子黒板、大型テレビの利用の様子



評価と課題

上海日本人学校からの帰任後、全海研に参画しながら、兵海研の中でも率先して活動した。さらに宝塚市の中学教員による英語教育と視聴覚教育（ICT）の担当者会に参加し、積極的に活動してきた。学会や部会などで積極的に研究発表を続けてきたことで、小中の英語とICT教育が私の教育実践のテーマであることが広く知られるようになっていた。「英語とICTの実践実績あり」と評価されたことで、多くの場から声がかかり、研究や発表の機会がさらに増えていったのだと思う。

発表することは大変重要である。それを直接聞いた人の役に立つだけでなく、次に広げるという効果も期待できる。

同じ理由で、様々な学会に積極的に参加して、発表の機会を持つようにした。これによって、日本各地に人脈ができた。



実践に至った経緯と提言

市立中学教員として宝塚市と西オーストラリア州メルビル市アップルクロス校の交換留学事業にかかわっていたことから、在外教育施設での教育に興味を持ち、1991（平成3）年に上海日本人学校に赴任した。当時70名程度の小規模校だった。天安門事件の直後で政情が不安定で、緊張感があった。

オーストラリアとの交流事業で現地の学校の授業見学をしていたので、ある程度こういう授業展開になるだろうと想像はしていたが、やはり日本以外の地で日本人の子どもたちを教えることは、国内の中学とは大きく違っていた。それまで教えていた下町の中学でのやり方からは大幅に変える必要に迫られた。まるでトンカチで頭を殴られたような衝撃だった。

多言語環境で育つ子どもたちの英語力はバラバラで、ネイティブスピーカーや、日本語よりも英語のほうが得意な生徒もいれば、英語初習者の生徒もいた。英語を使いこなしている生徒たちは、日本の教科書を使った「日本式の英語」に反発することも多い。一方で、中学校の英語は帰国後の高校受験に直結する。「入試で得点できる英語」が必要で、保護者からの期待も大きい。多様な英語力を持つ生徒たちの様子を見ながら、教科書以外の教材も活用しながら進めていった。

上海では中国語が中心だが、街ではホテルなどで英語も通じる。国際語である英語ができれば、いろんな国の人と話ができると感じた。そして、日本人はもっと世界に目を向けないといけないと思った。

1994年はまだインターネットが爆発的に普及する前で、通信はFAXが主流、国際電話は高額で、日本とのやりとりにもとても苦労した。大学時代に研究室でコンピューターを使用していてパソコン通信について知識があったことから、在外校におけるパソコン通信ネットワーク活用についての研究を実施、文部科学省に採択された。ICTは海外子女教育に活かせるものだという実感を得て、これから様々な局面で活用されるべきであると考えた。

多様な子どもたちに対する英語教育と、教育現場におけるICT技術の必要性を実感したのは、その後の教員生活の糧ともいべき経験だった。この二つは、その後の私の教育実

践の中心テーマとなった。

帰任後の中学の中には文科省の国際理解教育の推進校もあり、帰国子女も多く在籍していてそのケアにもあたった。帰国子女が疎外感を持たないように配慮し、また英語の授業でリーダーシップを発揮できるように工夫した。その後派遣された神戸大学発達科学部附属住吉中でも、帰国子女クラスの授業を担当したこともあった。

帰国後の公立中学では、授業のやり方をまた変える必要があった。もちろん上海赴任前の授業スタイルに戻したわけではなく、上海の経験を活かして、授業の導入にオーラルを使った形を取り入れた。

公立中学では生徒指導に時間を要することもあり、英語を苦手とする生徒への指導に苦労することも多かった。どうすれば英語に興味を持って、授業を楽しんでもらえるかを考えて工夫を重ねた。その経験は、その後小学生への英語授業で教壇に立ったときに生きた。小学校英語は聞く・話すことが中心で、英語の面白さを、手を替え品を替えて伝えていく必要がある。中学で、学力が低かったり、英語という教科にまったく興味を示さない生徒に対しておこなっていたアプローチを応用することができた。

現在は再任用教諭として中学で特別支援の英語教育にも携わっているが、この経験はそこでも活用できることが多いと感じている。

中学の教育現場での仕事をこなしながら研究会などの活動が続けることは、時間的・体力的には大変なことでもあった。そんななかでもやってこられたのは、「世界を見てきた経験があるのだから、自分ができることはやりたい、やらなくては」という意欲だったと思う。

また、所属していた全海研や兵海研には活発に活動している先輩が多くいて、仲間にも恵まれていた。年に数回の研究会や懇親会で情報を共有した。周囲の刺激があったので、自分も頑張ろうという気持ちになった。切磋琢磨する場があったことが、長くモチベーションを保てた要因だと思う。だからこそ、これからはますます仲間を増やし、手をつないでいかないといけないと思っている。ただ、活動メンバーはやはり限られてしまう。意欲があっても多忙などの理由で続かなかったり、また、在外校勤務の経験に触れられたくないという人もいる。たくさんの人を引っ張り上げようと活動してきたが、やはり思うようにいかないこともあった。

研究会の活動には土日などのプライベートな時間を充て、日常の学校業務に影響がないように心がけたが、教諭時代には、学校の管理職にも活動に理解を示してもらえたのはありがたかった。

現在、小学校の英語教育はようやく流れに乗りつつある。しかしまだまだ英語を教えることを苦手としている教員は多い。そしてやはり現場は忙しくて大変だ。そういう現場をサポートするために、すぐに活用できる教材や指導法などをまとめて提供できないかと考えている。いわゆる「授業の作り方」のようなハウツー本はたくさんあるが、在外校経験のある教員らしく違う視点から、世界の教育現場の情報も織り込みつつ、教員の根本にかかわるようなものをまとめたいと思っている。

また、教員を目指している若い学生に、教員という仕事について伝えたい。多忙すぎて「ブラック」と言われる面があることは否定できないので、そこは変えていく必要がある。本当に、大変ではあるがやはり魅力のある仕事である。

上海日本人学校での体験があったからこそ、これまで頑張ってきたのだと思っている。日本人学校勤務は、私にとってはそれだけの価値ある体験であった。今後在外校に赴任する教員は、決して物見遊山の気持ちで赴任するのではなく、自分が海外でどのように変わることができるか、そして帰国後にそれをどう活かすことができるかをよく考えてほしい。在外校勤務は、帰国後のほうが重要である。

上海時代から数えて、この30年間のインターネットの普及による通信環境の変化は劇的だった。ICT教育も変化してきているし、新しい取り組みもますます増えている。

最近ではメタバースという言葉がブームになっているが、今後はこうした仮想の世界が当たり前になっていく。私たち大人世代からは想像しにくいことだが、実は子どもたちはすでにゲームなどを通して、すでにその世界に慣れ親しんでいる。

今までは教室対面授業に勝るものはないといわれてきたが、コロナ禍もあってオンライン授業も急速に普及することになった。児童生徒に一人一台配布されるようになったタブレットの活用も、ますます進んでいこう。タブレットで優れた教員による配信授業を受け、教室ではインストラクターがそれをサポートする。先生がいらないという未来が来るかもしれない。